



それぞれの視点

櫛田美知子

社会に生かす当事者の体験

プロフィール：
脊髄損傷にて20年前より車いす生活。看護師として地域包括支援センターに勤務。

2014年6月、WFOT大会2014の市民公開講座に当事者3人とOTで登壇した。作業療法体験者として「私にとって、作業療法はココロのCPR(心肺蘇生法)だった」と語った。階段事故で一瞬にして重度障害者となり入院中、絶望感から救ってくれたのは、幼い子どもたちの母親であるという意識を取り戻す作業療法だった。

退院してすぐ、車いすでの子育てが始まった。三女は当時2歳、地域でいろいろな力を借りてきた。そして20年経った今、子育てのために地域へ車いすで出た体験が生かされるようになってきた。

いつもノンステップバスにスロープから乗るが、ある日、子どもたちが身を乗り出して見ている、先生も乗り合わせたことがあった。それがきっかけで、近所の小学生に車いすでの生活を毎年話すことになった。そこには目を輝かせてたくさんの質問をする子どもたちの姿がある。エレベーターのボタンを押してしてくれたり、書店やスーパーでは物が届かない時に取ってくれたり、駅の券売機も車いすから画面が見えない時、手伝ってもらったり、街での嬉しい実体験を伝えている。また地域包括支援センターの仕事でも毎年、中学生に車いす体験学習を通して優しい街や、認知症になっても住み続けられる安心な街について共に考える機会があり、車いすでの生活も伝えている。

それから身近なTさんを紹介したい。「認知症当事者研究」という勉強会に参加した時のことである。テーマは「認知症をどう伝えるか」で、取材される側と取材する側が、共に話し合う場で

あった。認知症がある当事者の視点から、認知症や社会を見つめることの大切さが語られた。帰路、夜の首都高速道路を手動装置で運転する重度障害者の私と助手席にはアルツハイマー型認知症と診断された80歳のTさんの姿があった。2人の共通点は新聞やマスコミなどに病気や障害を公開したところである。同じような立場で悩み、苦しみ、混乱している方々に自分たちの体験や日常生活が少しでも役に立てればと願ってのことである。Tさんは、認知症により生活に支障をきたさないよう日頃からメモやファイリングをしっかりと行っている。私のほうがTさんを頼って「この前、何でしたかねえ？」と聞いてしまう時がある。「〇〇(認知症の薬)あげようか？」とTさんは冗談を言い、笑い合う。「この2人がこんな夜に都内まで勉強しに来ているなんて想像できるかな？」と、Tさんはおにぎりを2個取り出した。「100gと80g、どちらがいい？」と健康管理にも気をつけて夜食のサプライズ！お腹も心も満たされた。こんな時間を共有していると、病気や障害はあっても、大切なのは「人」としてのつながりや生き方だと思えてくる。先日認知症になって生活をどう工夫しているか、どんな思いで生活しているかなど認知症を正しく理解してもらうために、講師役で地域に出かけたTさんである。

いろいろな当事者が身近な地域で自分の声で体験を語ることで、ユニバーサル社会の風が心地よく吹く街となっていけそうな気がする。誰もが住みやすい街は身近なところから。

地域

リハビリテーション

12

December
2014

特集

医療的ケアの必要な 重度障害のある子どもを 地域で支えるために



連載

それぞれの視点

小児科 高増先生のリハスタッフが知っておきたい小児の臨床栄養
失語症者へのリワーク・サポート—当事者・支援者・雇用者からの声
つながりをパワーにかえよう！当事者の会の活動を知る
感性の輝き

三輪書店